

桜井市

平成22年度国庫補助による 発掘調査報告書

纏向遺跡第169次調査

2012. 3. 30

桜井市教育委員会

桜井市

平成22年度国庫補助による 発掘調査報告書

2012. 3. 30

桜井市教育委員会

序

私達の桜井市は奈良盆地の東南部に位置し、市域には山地より流れ出る粟原川、寺川、初瀬川、巻向川等の清流を集めた大和川がほぼ東西に横断し、この地を生きる多くの人々に限りない豊かさを与えて続けています。

桜井市内で過去の営みを示すものとして、大和川の北側は芝遺跡、纏向遺跡や箸墓古墳、纏向石塚古墳をはじめとする纏向古墳群、南ではメスリ山古墳、茶臼山古墳、上之宮遺跡、大福遺跡、吉備池廃寺など、全国的にも貴重な文化遺産が多く存在しています。これらの遺跡はこれまでの数々の発掘調査の積み重ねによって日本の歴史を塗り替える多くの事実を私たちに提供してくれています。

桜井市ではこのような遺跡を保護し、啓発するための事業の一つとして市内遺跡の調査・保存に力を入れており、本書には平成22年度に桜井市が国・県の補助を受けて実施した発掘調査のうち纏向遺跡第169次の調査成果をおさめております。本報告によって貴重な歴史遺産に対する理解と愛着を深めていただき、調査した資料が広く活用されることとなれば当教育委員会としても望外の喜びであります。

最後になりましたが、現地調査にあたりまして協力していただいた地主及び地元協力者の方々、指導・助言を頂いた多くの関係諸機関の方々、また、酷暑、極寒のなか作業に従事していただいた作業員の方々や学生諸君、遺物の整理・報告書の作成に協力していただいた整理員の方々に深く御礼を申し上げ、序の言葉にかえさせていただきます。

平成24年 3月30日

桜井市教育委員会

教育長 雀 部 克 英

例 言

1. 本書は平成22年度国庫補助事業として奈良県桜井市教育委員会が実施した纏向遺跡第169次調査の報告書である。
2. 平成22年度調査主体：桜井市教育委員会事務局 教育長 雀部克英、事務局長 松田至功
文化財課長 竹田勝彦、文化財係長 橋本輝彦、主査 寺田智子、
主任 松宮昌樹、福辻淳、丹羽恵二、
臨時職員 木場佳子、福家恭、武田雄志、苅谷史穂、西岡恵美
3. 調査担当者：丹羽恵二
4. 調査補助員：堂浦千景、小島宏貴、広瀬侑紀（京都橋大学）、中林維吹（奈良大学）
5. 調査作業員：井上久幹、上田猛、北村勝弘、田村則佳、吉岡靖夫、吉田友侗
6. 整理作業及び報告書作成：嶋岡由美、井ノ本奈津子、北畑陽子、吉川晴美、川田美和、柳原唯、
太田久仁子、小松令子
7. 現地調査及び遺物整理に関し、以下の方々から様々なご指導・ご教示を頂いた。ここに記し感謝の意を表します。（敬称略、順不同）
苅谷俊介（日本考古学協会員）、萩原儀征（同）、寺沢薫（奈良県立橿原考古学研究所）
8. 執筆・編集者：丹羽恵二
9. 本書における方位・座標はすべて世界測地系によるものを示す。方位は座標北を表し、レベル高はすべて海拔高（T.P）を表す。
10. 図版の遺物番号は、該当する各節の図の遺物番号に対応する。
11. 出土遺物および調査記録については、桜井市教育委員会が保管している。活用されたい。

目 次

第1章	平成22年度の国庫補助による発掘調査	1
第2章	纏向遺跡第169次発掘調査報告	3
図版		
抄録		

挿 図 目 次

図1	桜井市の位置	1
図2	平成22年度国庫補助事業による調査位置図 (S = 1/40,000)	2
図3	纏向遺跡第169次調査位置図 (S = 1/2,000)	3
図4	調査区平面図 (S = 1/60)	4
図5	調査区断面図 (S = 1/60)	5
図6	SK1001~1003の断面図 (S = 1/40)	7
図7	SK1002の遺物出土状況 (S = 1/20)	8
図8	SK1001出土土器 (S = 1/3)	9
図9	SK1002出土土器① (S = 1/3)	10
図10	SK1002出土土器② (S = 1/3)	11
図11	SK1003出土土器 (S = 1/3)	12
図12	縄文土器 (S = 1/2)	12
図13	木製品 (S = 1/4)	13

表 目 次

表1	平成22年度国庫補助による発掘調査一覧	1
表2	調査区断面図(図5)の土層注記	6
表3	出土遺物観察表	14

図 版 目 次

- | | | | |
|------|--|------|---|
| 図版 1 | 纏向遺跡第169次調査（1）
SK1001検出状況（南東より）
SK1001半裁断面（北東より）
SK1003半裁断面（北より） | 図版 4 | 纏向遺跡第169次調査（4）
旧河道東壁断面（西より）
旧河道西壁断面（南東より）
旧河道（西より） |
| 図版 2 | 纏向遺跡第169次調査（2）
SK1002検出状況（東より）
SK1002半裁断面（西より）
SK1002遺物出土状況（北西より） | 図版 5 | 纏向遺跡第169次調査（5）
出土遺物① |
| 図版 3 | 纏向遺跡第169次調査（3）
SK1002遺物出土状況（南東より）
SK1002完掘状況（北東より）
調査区全景（北より） | 図版 6 | 纏向遺跡第169次調査（6）
出土遺物② |
| | | 図版 7 | 纏向遺跡第169次調査（7）
出土遺物③ |
| | | 図版 8 | 纏向遺跡第169次調査（8）
出土遺物④ |

第1章 平成22年度の国庫補助による発掘調査

1. 桜井市の位置と環境

桜井市は、奈良盆地の南東部に位置する人口約6万余人、面積98.93km²の都市である。鉄道や国道により、大阪などの大都市と結ばれるなど近郊都市としての様相をみせている一方で、文化財が豊富な観光都市としての側面をもっている。北は天理市・奈良市、東は宇陀市、西は田原本・橿原市、南は明日香村・吉野町と境を接しており、奈良盆地と山間部の宇陀、吉野地域との結節点で古くから交通の要衝であったと考えられ、数多くの遺跡が存在する。

弥生時代では銅鐸、木甲などが出土した大福遺跡や、絵画土器の出土した芝遺跡が平野部に立地する。古墳時代前期では市北部に広がる纏向遺跡が日本列島における中心的な集落と考えられており、その範囲には箸墓古墳をはじめとする出現期の古墳が数多く分布する。平地の南縁では桜井茶臼山古墳・メスリ山古墳という2基の大型前方後円墳が存在する。古墳時代後期から飛鳥時代

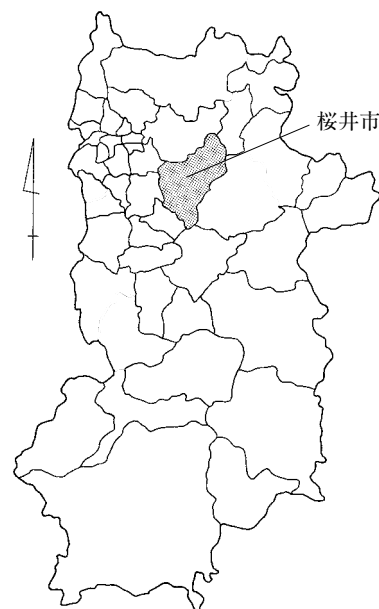


図1 桜井市の位置

にかけては赤坂天王山1号墳や文殊院西古墳、舒明陵に比定される段ノ塚古墳などが存在し、古代寺院では吉備池廃寺、安倍寺跡、山田寺跡などがある。これらはいずれも大王家や有力氏族と密接な関係があるもので、桜井市周辺が古代国家の形成期に重要な役割を果たした地域といえる。桜井市ではこのような市内遺跡の範囲確認調査を行うとともに、開発に先立つ緊急調査を日々行っている。

2. 平成22年度の発掘調査

平成22年度に実施した国庫補助による発掘調査は4件である(表1)。このうち、纏向遺跡第169次調査は個人住宅建設に伴う発掘調査であり、纏向遺跡第168次調査、第170次調査は重要遺跡範囲確認調査であった。また、茅原大塚古墳第4次調査は、史跡整備に先立って実施された範囲確認調査である。本書ではこれら計4件の調査のうち、纏向遺跡第169次調査の成果について報告している。

表1 平成22年度国庫補助による発掘調査一覧

地図No.	調査名称	所在地	期間	面積	主な遺構・遺物	担当者
1	纏向遺跡第168次	辻63-1	7月1日～10月18日	465m ²	柱列、大型土坑、獣骨、桃核、植物種子、ミニチュア土器、竹製籠	橋本・福家・武田・苅谷
2	茅原大塚古墳第4次	茅原718、721、723-1、723-1	11月16日～3月24日	238m ²	葺石、埴輪棺、盾持人埴輪	福辻
3	纏向遺跡第169次	太田204-6	11月24日～12月9日	58.6m ²	土坑、旧河道	丹羽
4	纏向遺跡第170次	辻63-1	2月28日～3月29日	70m ²	掘立柱建物、柱列、溝	橋本・武田

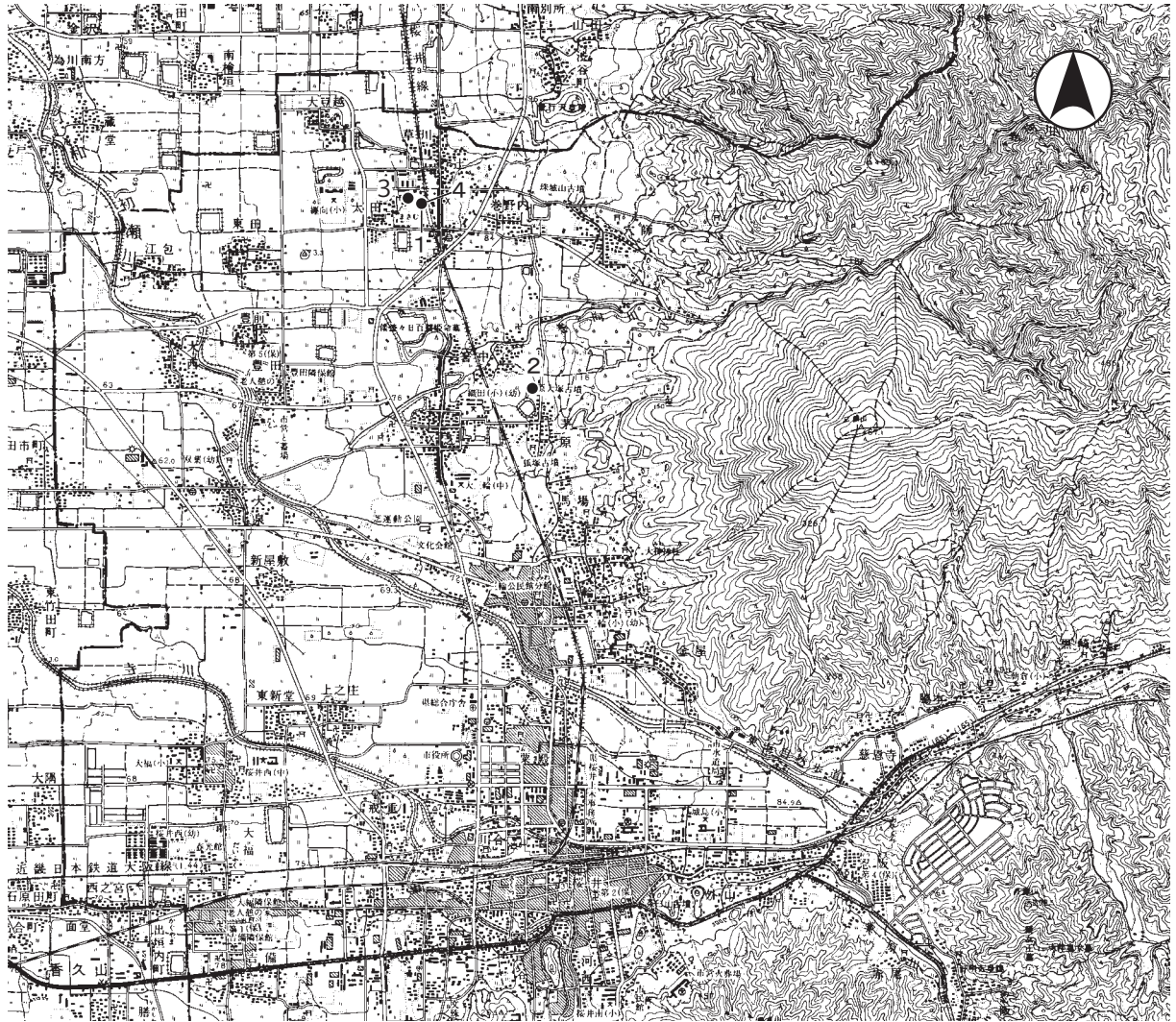


図2 平成22年度国庫補助事業による調査位置図 (S = 1/40,000)



纏向遺跡第169次調査風景

第2章 纏向遺跡第169次発掘調査報告

1. はじめに

纏向遺跡第169次調査は、大字太田204-6で行われた個人住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査である。調査面積は58.6㎡である。調査期間は、平成22年11月24日から12月9日である。

調査地は纏向遺跡の中央やや西よりで、いわゆる太田北微高地内に位置している¹⁾。太田北微高地は、西側には纏向石塚古墳や矢塚古墳、勝山古墳などの発生期の前方後円墳が築かれ、そこから東に向かうと「祭祀土坑」といわれる土坑が多く検出される地域²⁾、また、さらにその東側には庄内式期と思われる建物群が検出されており³⁾、纏向遺跡の中でも遺構の密度や遺物の量は比較的多い地点といえる。今回の調査地は第166次調査で建物群が検出された場所のすぐ西側にあたるが、その場所よりも一段低い場所に位置しておりどのような性格の遺構が検出されるのか興味を持たれる場所であった。

2. 基本層序 (図5)

調査地はすでに駐車場に利用されていたこともあって、現代耕作土の上に盛土がなされていた。調査では重機により、盛土及び現代耕作土を除去し、それ以下は人力により、掘削及び遺構の検出を目

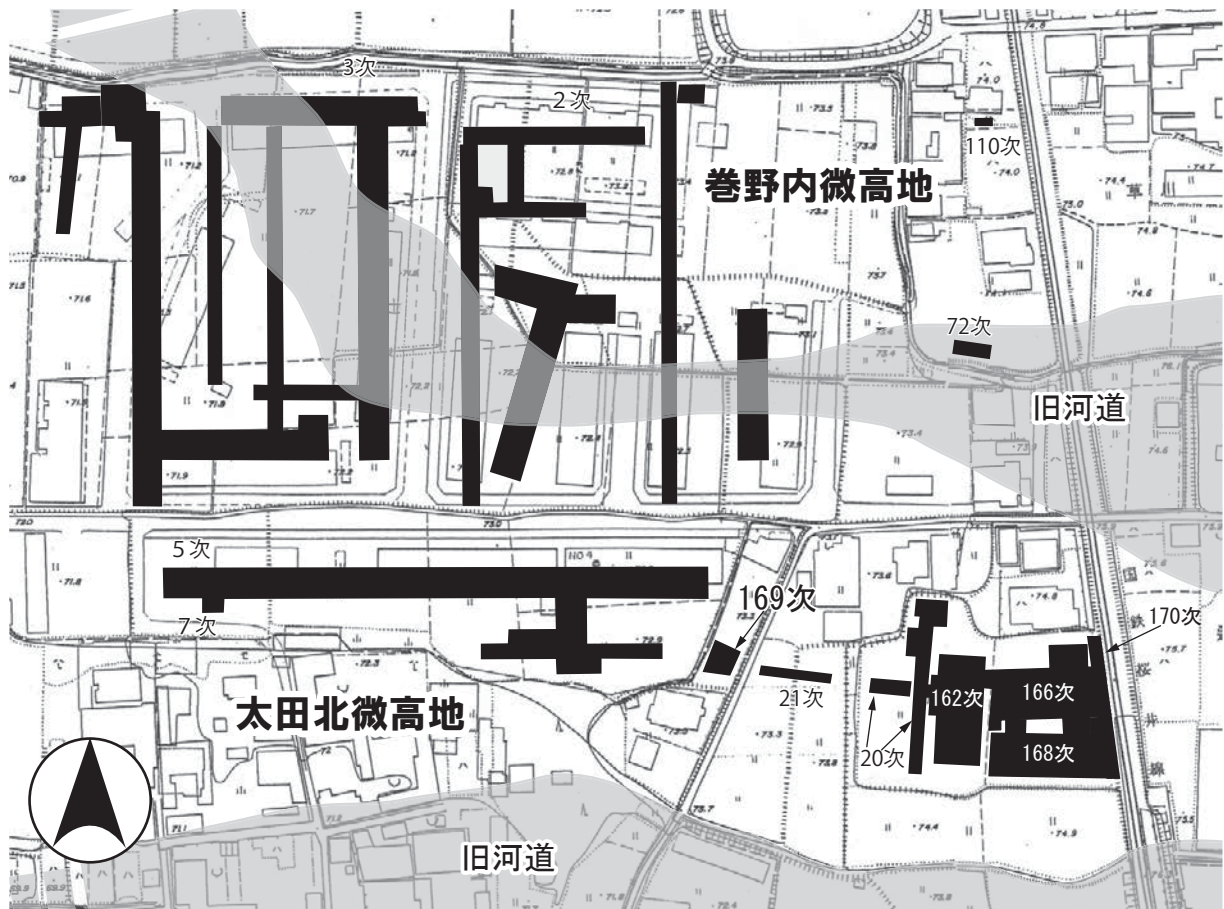


図3 纏向遺跡第169次調査位置図 (S = 1/2,000)

指した。

調査地の基本層序は、現代盛土（層厚約40cm 図5-1層）、現代耕作土（層厚約50cm 2・3層など）、緑灰色シルト～細粒砂（層厚約30cm 43・44層）、褐灰～黒褐色シルト～粘土（層厚10～15cm 45層）、腐植層であるオリーブ黒シルト～粘土（層厚約40cm以上 47層）の順番になる。緑灰色シルト～細粒砂上面で、古墳時代初頭以後の遺構が検出されている。緑灰色シルト～細粒砂以下は、部分的に粗砂などが間に含まれ、腐植層も見られるので河川堆積もしくは湿地状堆積だと思われる。ただ、部分的に入れた断ち割りからは全く遺物が出土しなかったので、堆積時期は不明である。

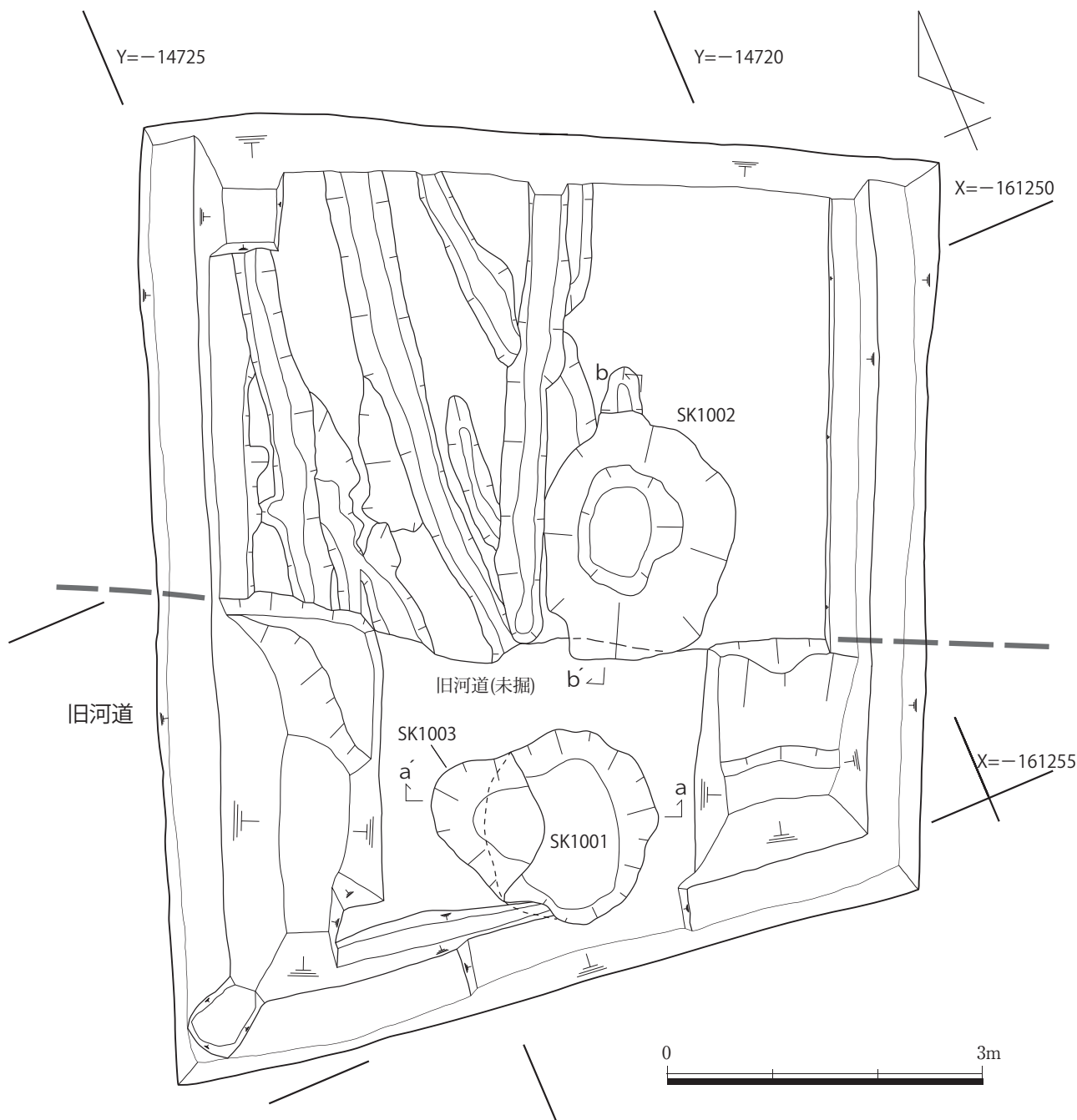
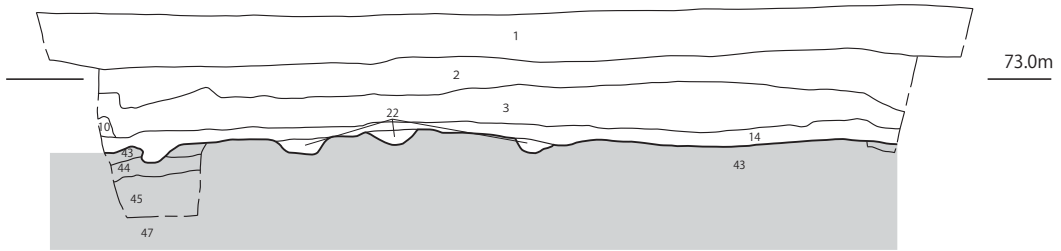
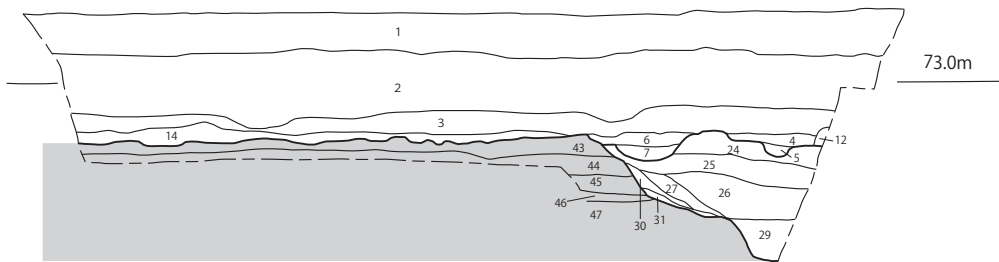


図4 調査区平面図 (S = 1/60)

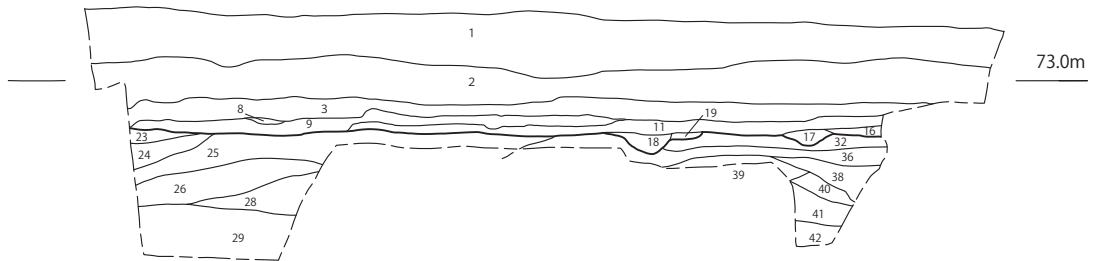
北壁断面



東壁断面



南壁断面



西壁断面

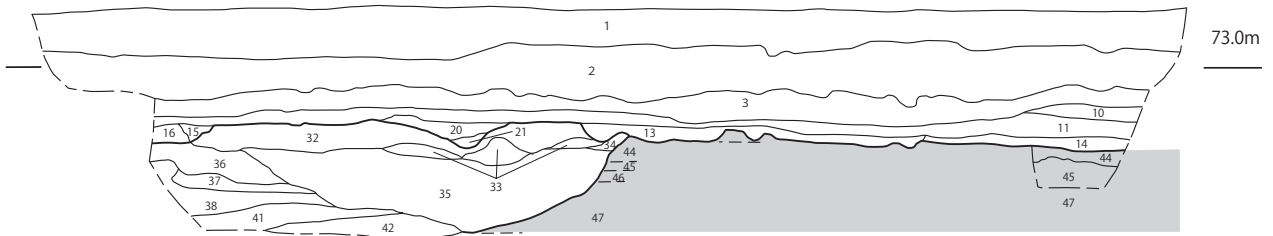


图5 調査区断面図 (S = 1/60)

表2 調査区断面図(図5)の土層注記

層番号	断面	土色・土質	
1	北東南西	現代盛土	現代盛土
2	北東南西	暗緑灰(5G3/1)シルト質砂質土(礫、ブロック土混じる)	現代耕作土
3	北東南西	オリブ黒(7.5Y3/2)シルト質砂質土(径~10mm程度の礫が多く混じる)	
4	東	オリブ黒(7.5Y3/2)シルト~極細粒砂	
5	東	緑灰(10G5/1)シルト~極細粒砂(粗粒砂混じり)	
6	東	緑灰(10G5/1)シルト~極細粒砂(粗砂混じり)	
7	東	緑灰(10G5/1)シルト~極細粒砂(6より粗粒砂の割合が多い)	
8	南	暗緑灰(5BG3/1)シルト(礫・ブロック混じり)	
9	南	暗緑灰(5BG3/1)シルト(礫・ブロック混じり)	
10	北西	暗緑灰(5BG4/1)シルト(径~4cm程度の礫混じる)	
11	南西	暗緑灰(5BG4/1)シルト(径~4cm程度の礫混じる)	
12	東	青灰(5B6/1)~灰白(N7/)粗粒砂	素掘溝埋土
13	西	オリブ黒(7.5Y3/2)シルト~極細粒砂	
14	北東西	暗緑灰(5G4/1)シルト(径~4cm程度の礫少量混じる)	旧耕作土か
15	西	オリブ黒(7.5Y3/2)シルト~極細粒砂(やや淡い)	素掘溝埋土
16	南西	オリブ黒(7.5Y3/2)シルト~極細粒砂	
17	南	オリブ黒(7.5Y3/2)シルト~極細粒砂	
18	南	オリブ黒(7.5Y3/2)シルト~極細粒砂	
19	南	オリブ黒(7.5Y3/2)シルト~極細粒砂(やや淡い)	
20	西	オリブ黒(7.5Y3/2)シルト~極細粒砂	
21	西	オリブ黒(7.5Y3/2)シルト~極細粒砂(やや淡い)	
22	北	暗緑灰(5G4/1)シルト(中粒砂混じり)	
23	南	青灰(5B6/1)~灰白(N7/)粗粒砂	
24	東南	青灰(5B6/1)~灰白(N7/)粗粒砂(粗粒砂~小礫混じり)	
25	東南	灰白(N7/)砂礫(径1~3cm程度が多い)	
26	東南	黄橙(7.5YR7/8)粗粒砂(礫が多量に混じる、鉄分付着)	
27	東南	黄橙(7.5YR7/8)粗粒砂(礫が小さく、少量)	
28	南	砂礫層(径7~8cm、腐植層が間に入る)	
29	東南	砂礫層(径~15cm、腐植層がうすく混じる)	
30	東	浅黄橙(7.5YR8/6)中粒砂~粗粒砂と灰白(7.5YR8/2)中粒~粗粒砂がラミナ状に混じる	
31	東	灰白(7.5YR8/2)粗粒砂	
32	南西	灰白(N7/)砂礫(径1~3cm程度が多い)	旧河道
33	西	灰(N4/)粗粒砂(径~4cm程度の礫混じる)	
34	西	灰白(N7/)中粒砂	
35	西	砂礫層(径10cm程度)	
36	南西	灰白(N7/1)~灰(N6/)細砂に中粒砂が混じる	
37	西	灰白(7.5Y8/1)砂礫層(粗砂混じり径~5cm程度)に腐植混じる	
38	南西	灰白(N7/1)~灰(N6/)細砂に中粒砂が混じる(鉄分付着)	
39	南	灰白(7.5Y8/1)砂礫層(粗粒砂混じり 径~5cm程度)	
40	南	灰白(7.5Y8/1)砂礫層(粗粒砂混じり 径~5cm程度)に腐植混じる	
41	南西	オリブ黒(5Y3/1)シルト(細粒砂混じる)と灰白(5Y7/1)細~中粒砂の互層	
42	南西	砂礫層(径5cm程度)	
43	北東	緑灰(10G6/1~5G6/1)シルト極細粒砂(シルトブロックがわずかに混じる)	
44	北東西	緑灰(10G6/1~5G6/2)シルト極細粒砂(鉄分が沈着)	
45	北東西	褐灰(10YR4/1)~黒褐(10YR3/1)粘土(腐植がやや混じる)	
46	東西	灰白(2.5Y8/1)粗粒砂(径~5cm程度の礫混じる)	
47	北東西	オリブ黒(5Y3/1)シルト質粘土(腐植混じる)	

3. 検出遺構(図4)

前述したとおり、緑灰色シルト~細粒砂層上面で遺構の検出を行った。南北方向を主体とした素掘溝、土坑3基(SK1001~1003)、南端には旧河道を検出している。素掘溝は現代耕作土層よりも下から掘削されており、埋土から瓦器などがみられるため中世における耕作に関連する遺構だと思われる。

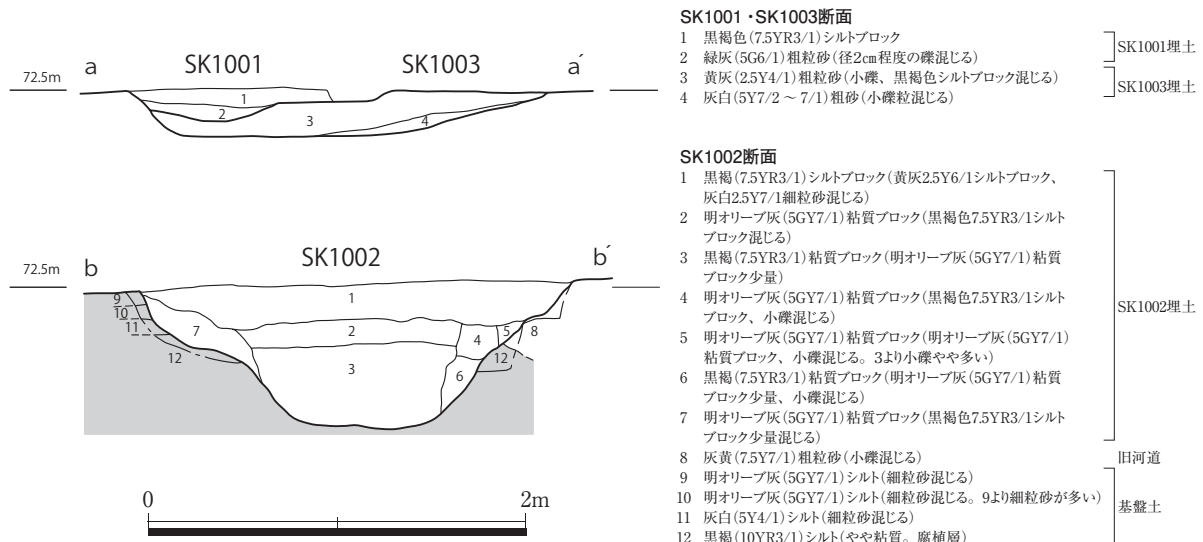


図6 SK1001～1003の断面図 (S = 1/40)

以下、主要な遺構についてみていく。

SK1001 調査区南端で検出した旧河道上面から土坑が検出されている。直径1.6～1.7mのほぼ円形の掘形で、深さは検出面から20cmに満たないため、上部は後世に削平されているものと思われる。埋土は黒褐色粘質土で、ブロック土(図6上-1層)が多く含まれるため、人為的に埋め戻された可能性がある。埋土中からは庄内3式期ごろの土器が出土している。遺構の性格は不明である。

SK1002 トレンチ中央からやや東の位置に長径2.2m、短径1.8mの南北にやや長い楕円形の掘形をしている。深さは検出面から約80cmである。埋土は基本的に上、中、下層の3層に分かれており、上層から順に黒褐色シルトブロック(図6下-1層)、明オリーブ灰色粘質土(黒褐色シルトブロック混じる)(2層)、黒褐色粘質土(明オリーブ灰色シルトブロック)(3層)となる。土器は上層と下層に多く、破片の大きさは下層に行くほど大きくなる。土坑の掘削は砂礫層まで達しており、当時も湧水していたと思われる。遺物は土器がほとんどで、木片などが少量みられた。土器は庄内3式期ごろのものである。土坑の性格はつかみにくいが、横断面の様子や遺物の出土状況から井戸の可能性も考えられるだろう。

SK1003 調査区の南のSK1001とほぼ同じ位置で土坑を検出した。東半分はSK1001とほとんど重なっているため、正確な形状は不明だが、直径1.5mは超えるものと思われる。深さは検出面から約25cmを測り、SK1001よりやや深い。埋土は黄灰色粗砂(図6上-3層)である。遺物は、底にへばりつくように壺の破片が出土したが、SK1001に比べると非常に少ない。掘削の掘形がSK1001と重なっているので、一連の遺構とも考えられるが、埋土や出土状況が異なるため、別遺構と判断している。遺構の性格は不明である。

旧河道 トレンチの南端で西北西の方向に流れる旧河道の北岸を検出している。ただ、南岸は調査区外で幅は不明である。河道の埋土は、粗砂や径～10cm程度の礫を含む砂礫層を中心とした堆積(上層 図5-24～35層)、細砂～粗粒砂と径～5cm程度の礫をふくむ砂礫層などに腐植層が間に入り込む

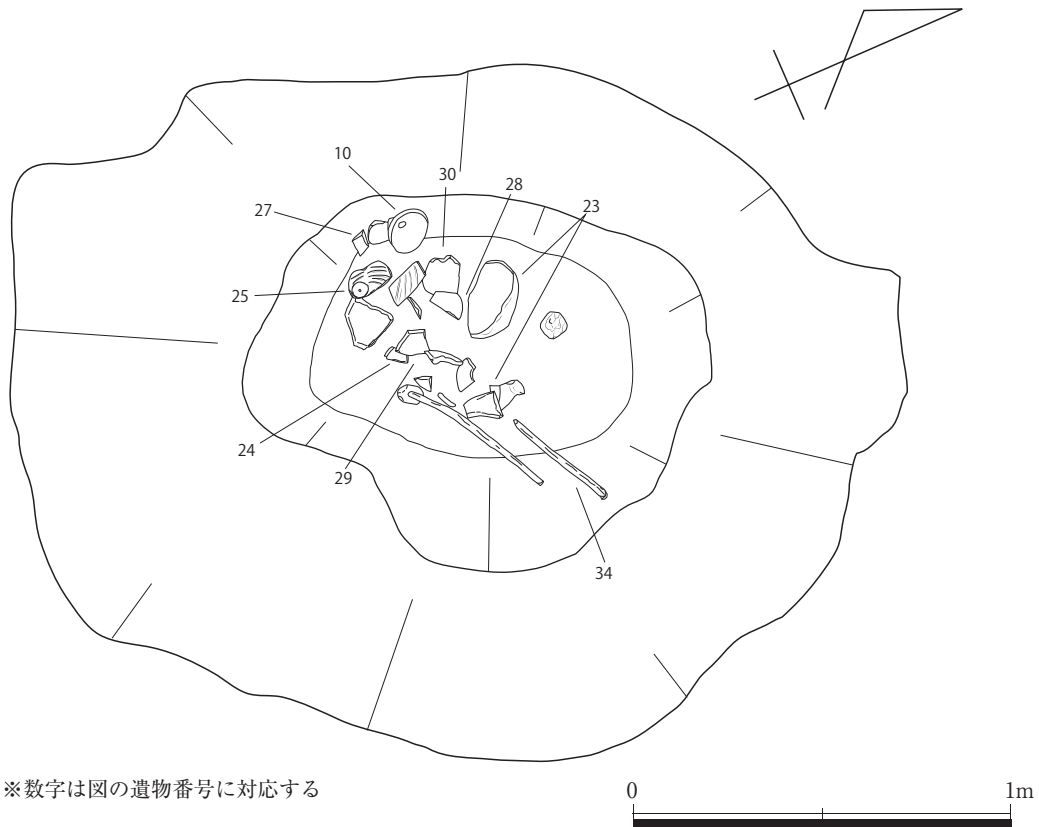


図7 SK1002の遺物出土状況 (S = 1/20)

堆積(下層 36~42層)と大きく分けられ、前者が後者を切るように流れたと思われ、少なくとも2回の大きな流れが確認できる。掘削は調査区の東端と西端の二か所に限って行っている。深さは作業の安全面から、検出面から1mまでしか確認していない。

出土遺物は、上層から土器片が少量出土しているが、小片のため明確な埋没時期は決められない。埋土上面からSK1001~1003の各土坑が掘削されているため、それらの遺構の時期である庄内3式期より古い。

4. 出土遺物

概要 本調査ではコンテナケース4箱分の遺物が出土している。覆土や素掘溝からは中世のものと思われる土器片は少量出土しているが、SK1001~1003の各遺構から出土している遺物のように庄内式期のもものが大半を占める。以下、各遺構から出土した遺物を述べていく。なお、各遺物の法量などについては遺物観察表(表3)を参照していただきたい。

SK1001 (図8) SK1001は上部を後世に削平されていたこともあって、各遺物の残存状況が良好なものが少なく小片が多い。器種としては甕や壺が大半を占め、そのうち口径などが復元できたものを中心に8点図示している。(1)は体部外面がタタキで内面はケズリ調整を行っている庄内式甕である。

(3)は二重口縁壺の口縁部付近の破片であるが、口縁端部は残存していない。内外面とも丁寧なミガキが施されており胎土も精微である。口縁部の段の外面には、刻み目が施され、その上には円形浮

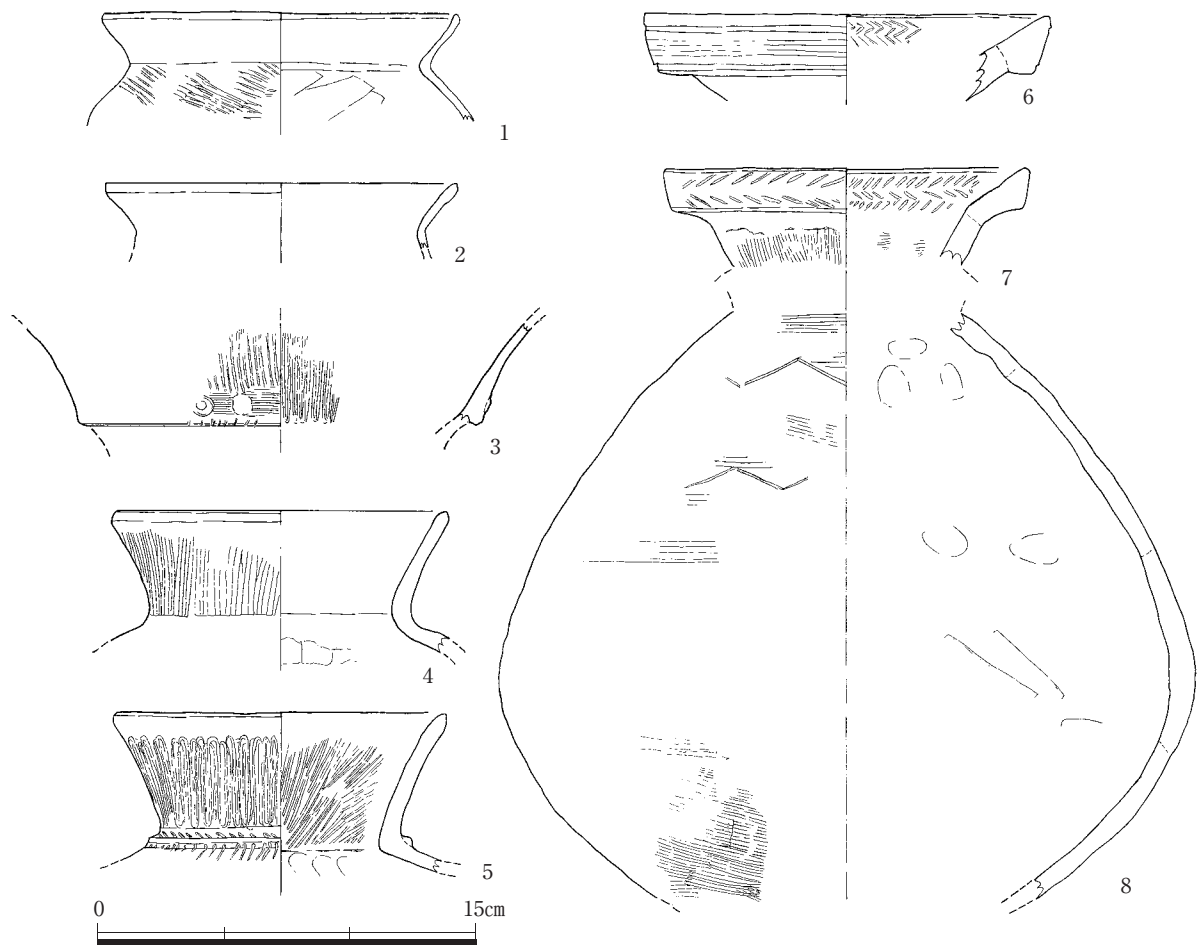


図8 SK1001出土土器 (S = 1/3)

文がある。(4)と(5)は、壺の口縁部で、そのうち(5)の外表面には丁寧なミガキが施され、頸部には断面が三角形の突帯状のものが貼り付けられその上には刻み目が施される。(6)と(7)は東海系の柳ヶ坪型壺の口縁部である。それぞれの胎土の色調は、橙色系の(5)と白色系の(6)と異なり、口縁部外面の文様構成もそれぞれ異なる。(8)も同じく東海系の壺の体部と思われ、上半部に2段分の山状の文様が刻まれているのが確認できる。外面には朱の付着がわずかながら確認できる。また胎土やその色調から接合面はないものの(7)と(8)は同一個体の可能性が高い。

SK1002 SK1002から出土した土器量は、本調査の中では一番多い。遺物は主に上層と下層からの出土しており、上層に小片が多いのに対し、下層は破片が大きいものが多い。完形で出土したものはなく、図上で復元が可能なものも(24)と(25)のみである。それぞれの残存率は(24)は全体の60%程度、(25)は70%程度である。器種としては、壺や甕類が一番多く、その他では高坏(9)や器台(10)の破片が少量見られる。

甕は弥生形甕や庄内形甕の影響を受けたものが中心で、布留形甕だと考えられるものは破片を含めて出土していない。甕(23)は口縁から体部の中程まで残存している。口縁部は体部上半にかけては横ナデが施され、体部中ほどにはハケ調整が施される。体部内面はケズリ調整である。甕(24)は、

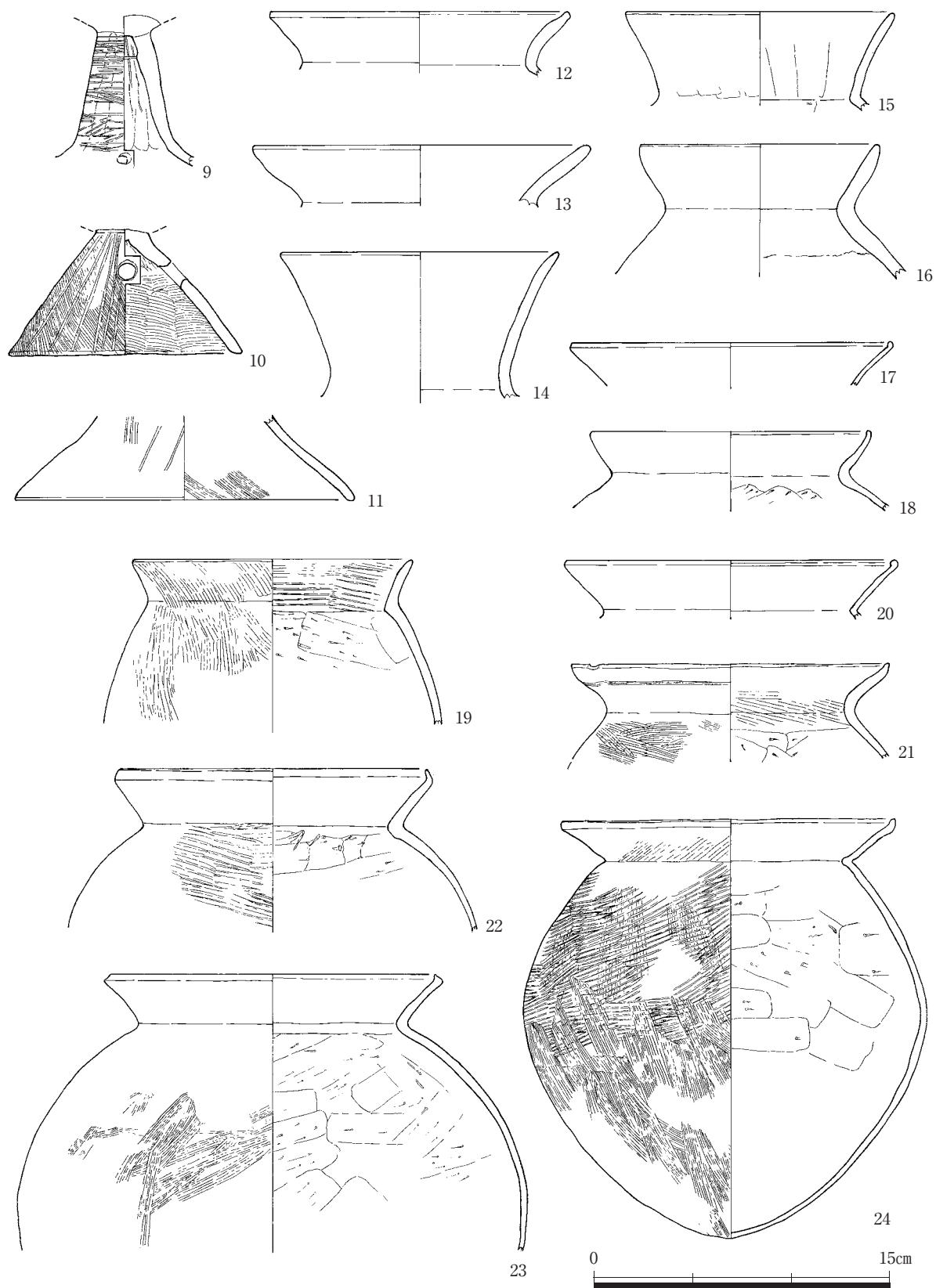


図9 SK1002の出土土器① (S = 1 / 3)

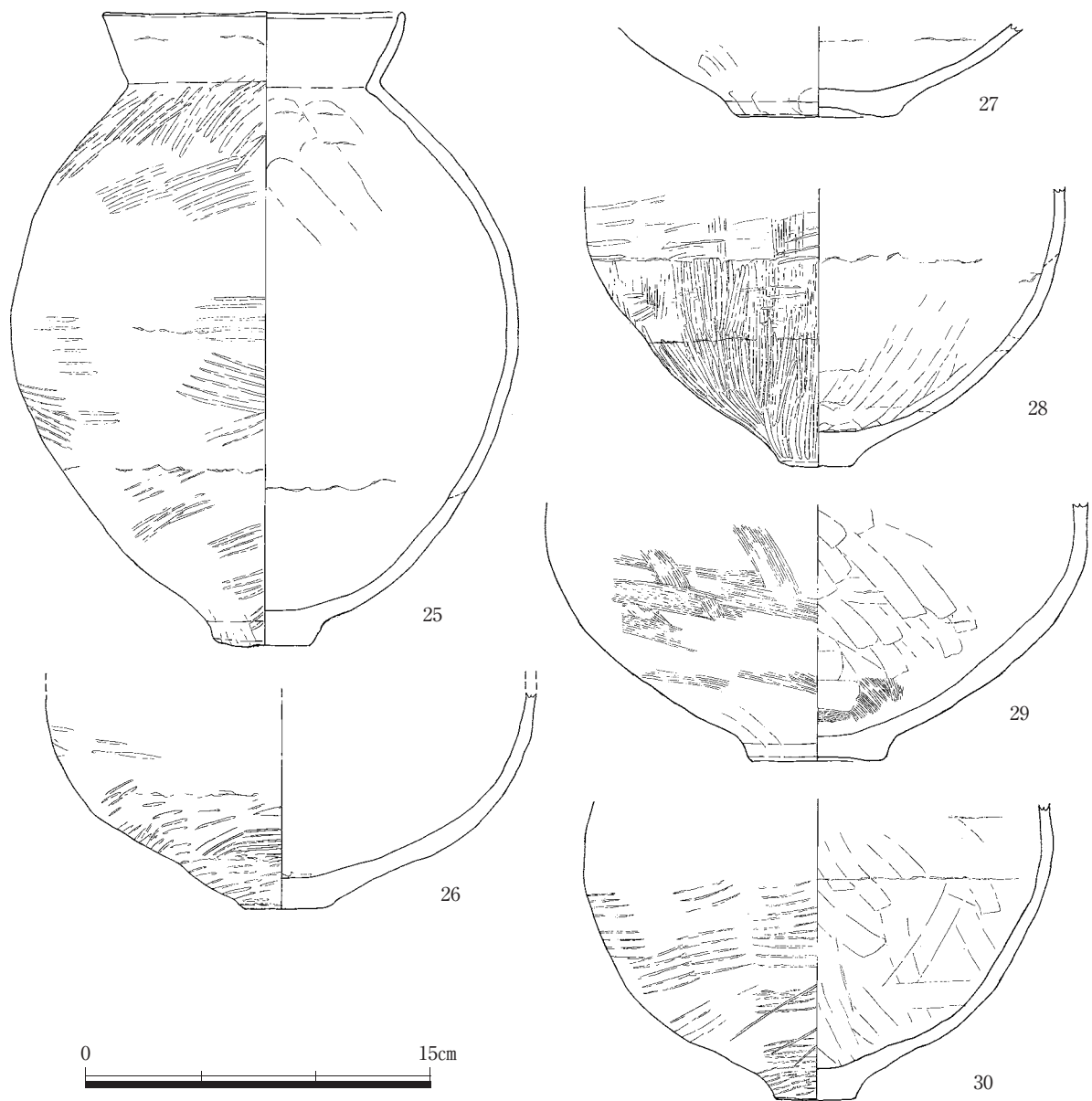


図10 SK1002の出土土器② (S = 1 / 3)

比較的体部外面はハケ調整のち、右上がりのやや細かいタタキ調整が施されている。下半のみタタキ調整後、もう一度、縦方向のハケが施されている。甕(25)は外面にはタタキ、内面はナデ調整が施されている。特徴的なのは器壁で、他と比べると、全体的にもろい。それが胎土によるものなのか、使用の違いによるもの(二次的な被熱をうけたのかなど)なのか判断がつかないが、特徴的である。SD1002から出土したもので土器以外では木片などが数点出土しているが、明らかに加工が行われているのは(34)のみである。(34)は棒状の木製品で、残存長32.7cm、最大幅1.8cmを測る。ちょうど縦方向に半裁された状態である。片方のみ端部が残存している。表面は面取りが行われており、復元すると横断面は八角形になるものと思われる。残存している端部は丸みを帯びた形状になっている。端部は側面のように面取りが行われていないのか、使い減りにより丸みを帯びているのかは判断できない。

SK1003 SK1003からは出土遺物がほとんどなく、2点しか図示していない。鉢(31)は小片であるため正確な復元口径が出せないが、30cm程度になると思われる。(32)は甕の体部と思われるものである。口縁部は全く残存していないが、体部は約1/2残存している。外面の調整には底部付近はタタキのあとにミガキが施され、上半部は粗いハケを施している。

旧河道出土遺物か (33)は排土から採集した縄文土器の深鉢である。この排土は旧河道掘削時のものだと思われ、旧河道の埋土から出土した可能性が高い。縄文時代中期末もしくは後期初頭ごろのものだと思われる。

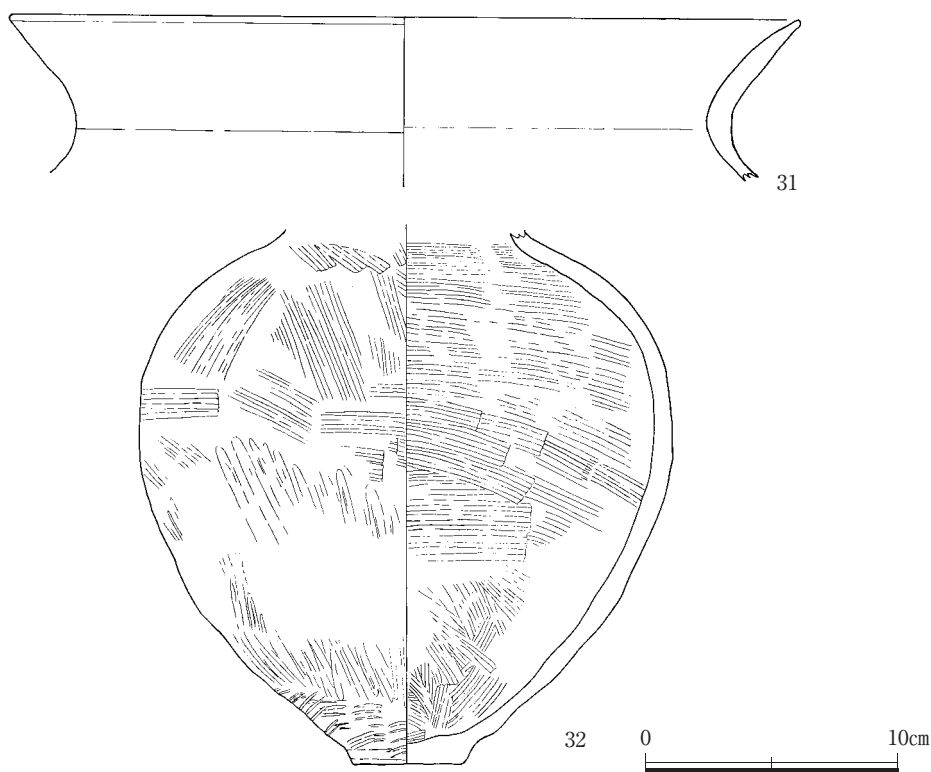


図11 SK1003の出土土器 (S = 1/3)

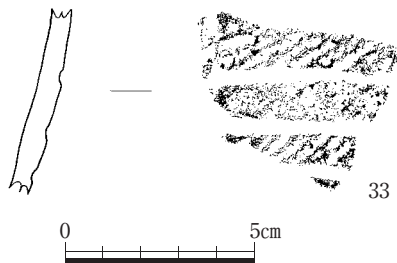


図12 縄文土器 (S = 1/2)

各遺構の時期 比較的出土量の多いSK1002は、甕の形態から庄内式期新相段階だと考えられ、寺沢編年による庄内3式期頃と比定できる。SK1001も同じく庄内式期新相だと考えられ、SK1003は判断できる材料は少ないが、遺構の切り合いからSK1001より古いと考えられるが、さほど時期差はないものと考えられる。旧河道に関しては、SK1003より古いのは确实だが、明確な埋没時期は特定できない。

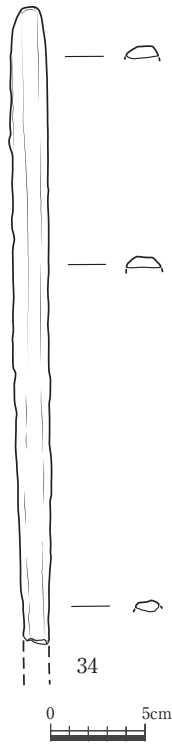


図13 木製品
(S = 1/4)

5. まとめ

今回の調査成果として、庄内3式期と思われる土坑が3基確認された。これらは西側の調査（第7次調査）で検出された成果と共通している。ただ、土坑からの出土遺物には祭祀を想像させるものではなく、土坑といっても様々な性格をもつものがあつたのであろう。各土坑の出土遺物を比較し、遺構の性格付けを行うことが今後の課題となろう。

また、一方でピットなど他の遺構は全く検出されなかった。その一つの理由として、土坑の深さなどを考慮すると、中世の耕作時などに調査地周辺が全体的に削平されてしまい、深さのない遺構が残らなかったと考えられる。また、最初に述べたように、調査区の付近は東側で建物群が検出された地盤よりも低く、東側とは異なった土地利用がなされていたことも想定されうる。

【註記】

- 1) 寺沢薫1984「纏向遺跡と初期ヤマト政権」『橿原考古学研究所論集』6 奈良県立橿原考古学研究所
- 2) 石野博信・関川尚功1976『纏向』橿原考古学研究所編 桜井市教育委員会
- 3) 橋本輝彦2009『纏向遺跡第166次調査現地説明会資料』桜井市教育委員会
- 4) 寺沢薫1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊 奈良県教育委員会

表3 出土遺物観察表

報告 番号	出土位置・層位	器種・種別	色 調	胎 土	焼成	法量(cm)			形態的特徴・調整など
						口径	底径	器高(残存)	
1	SK1001	甕	外面：7.5YR7/1明褐灰 内面：5YR6/4にぶい橙	密(径～1mmの砂粒を含む)	良好	14		(4.2)	外面：ヨコナデ(口縁)、タタキ(体部)、 内面：ヨコナデ(口縁)、ケズリ(体部)
2	SK1001	甕	外面：10YR5/3にぶい黄褐 内面：10YR5/3にぶい黄褐	密(径～2mm程度の砂粒を含む)	良好	14		(2.5)	外面：ナデ 内面：ナデ
3	SK1001	壺	外面：2.5YR5/2明赤褐 内面：2.5YR5/2明赤褐	密	良好			(3.8)	外面：ミガキ、円形浮文 内面：ミガキ
4	SK1001	壺	外面：7.5YRにぶい橙6/4 内面：7.5YRにぶい橙6/4	密(径～3mm程度の白色粒を含む)	良好	13		(5.5)	外面：ハケ 内面：ナデ
5	SK1001	壺	外面：10YR7/3にぶい黄橙 内面：10YR7/3にぶい黄橙	密(径～1mmの砂粒を含む)	良好	13		(6.3)	外面：ミガキ、刻み目 内面：ミガキ
6	SK1001	壺	外面：10YR8/3浅黄橙 内面：10YR7/1灰白	密	良好	16		(3.2)	外面：ナデ 内面：ナデ、綾杉文
7	SK1001	壺	外面：2.5Y7/2灰黄 内面：2.5Y7/2灰黄	密	良好	14.4		(3.9)	外面：綾杉文、ハケ 内面：綾杉文、ハケ
8	SK1001	壺	外面：10YR8/2灰白 内面：2.5Y6/1黄灰	密(径～1mm程度の砂粒を含む)	やや軟	最大径 27.6		(23.1)	外面：ハケ、山形文 内面：ナデか 磨滅
9	SK1002	高坏	外面：10YR6/3にぶい黄橙 内面：10YR6/3にぶい黄橙	密(径～1mm程度の砂粒・雲母を含む)	良好			(7.1)	外面：ケズリのちミガキ 内面：絞り痕
10	SK1002 下層	器台	外面：10YR6/3にぶい黄橙 内面：10YR6/3にぶい黄橙	密	良好		11.8	(6.3)	外面：ハケのちミガキ 内面：ハケ
11	SK1002 上層	高坏	外面：2.5Y7/1灰白 内面：2.5Y7/1灰白	密(径～1mm程度の砂粒を含む)	良好		17	(4.2)	外面：ミガキか 内面：ハケ
12	SK1002	甕	外面：10YR4/3にぶい黄褐 内面：10YR3/2黒褐	密(径～2mm程度の砂粒・雲母を含む)	良好	15		(2.9)	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ
13	SK1002 上層	壺	外面：7.5YR7/4にぶい黄橙 内面：10YR8/2灰白	密(～2mm程度の砂粒を含む)	良好	16.8		(3.1)	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ
14	SK1002 上層	壺	外面：10YR7/3にぶい黄橙 内面：2.5YR7/4淡赤橙	密(径～4mm程度の砂粒を含む)	良好	14		(7.2)	外面：磨滅により不明 内面：磨滅により不明
15	SK1002 下層	壺	外面：7.5YR7/4にぶい橙 内面：7.5YR5/2褐灰	密(～3mm程度の砂粒を含む)	良好	14.2		(4.5)	外面：ナデ(磨滅) 内面：ナデ(磨滅)
16	SK1002 上層	甕	外面：2.5Y8/2灰白 内面：2.5Y8/2灰白	やや粗い(径～6mm程度の砂粒を含む)	良好	12		(6.8)	外面：磨滅により不明 内面：磨滅により不明
17	SK1002 上層	甕	外面：N1.5/黒 内面：2.5YR6/2灰黄	密(径～1mm程度の砂粒・雲母を含む)	良好	16		(2.2)	外面：ナデ 内面：ナデ
18	SK1002 上層	甕	外面：7.5YR7/4にぶい橙 内面：7.5YR5/1褐灰	密(径～1mm程度の砂粒を含む)	良好	14		(3.8)	外面：剥離 内面：ケズリ
19	SK1002 上層	甕	外面：10YR7/2にぶい黄橙 内面：7.5YR7/3にぶい橙	密(径～1mm程度の砂粒・雲母を含む)	良好	14		(8.2)	外面：ハケ 内面：ハケ(口縁)、ケズリ(体部)
20	SK1002 上層	甕	外面：10YR6/2灰黄褐 内面：2.5YR6/2灰黄	密(径～1mm程度の砂粒・雲母を含む)	良好	16.6		(2.8)	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ
21	SK1002 下層	甕	外面：7.5YR橙、N2/黒 内面：5YR7/6橙	密(径～1mm程度の砂粒を含む)	良好	16		(4.9)	外面：ヨコナデ(口縁)、ハケ(体部) 内面：ハケ(口縁)、ケズリ(体部)
22	SK1002 上層	甕	外面：10YR6/3にぶい黄橙 内面：10YR6/3にぶい黄橙	密(径～2mm程度の砂粒を含む)	良好	15.6		(8.0)	外面：タタキ(体部) 内面：ケズリ(体部)
23	SK1002 下層	甕	外面：10YR6/3にぶい黄橙 内面：10YR5/2灰黄褐	密(径～2mm程度の砂粒を含む)	良好	16.4		(13.9)	外面：ハケ(体部) 内面：ケズリ(体部)
24	SK1002 上層	甕	外面：2.5Y6/3にぶい黄 内面：10YR4/2灰黄褐	密(径～2mm程度の砂粒を含む)	良好	16.7		21	外面：ナデ(口縁)、ハケのちタタキ 上半、下半はその上にハケ(体部) 内面ケズリ、底面には炭化物が付着
25	SK1002 下層	甕	外面：7.5YR8/4浅黄橙～ 10R6/3にぶい赤褐 内面：7.5YR8/4～10R6/3に ぶい赤褐	密(径～2mm程度の砂粒を含む)	良好	12.9	4	27.2	外面：タタキ 内面：ナデ
26	SK1002 下層	甕	外面：7.5YR浅黄橙8/3 内面：7.5YR浅黄橙8/4	密	良好		4	(9.1)	外面：タタキ 底部にもタタキ痕 内面：工具ナデ
27	SK1002 上層	壺	外面：7.5YR7/3にぶい黄橙 内面：7.5YR7/3にぶい黄橙	密(径～2mm程度の砂粒を含む)	良好		6.6	(3.8)	外面：磨滅により不明 内面：磨滅により不明
28	SK1002 下層	壺か甕	外面：2.5Y8/2灰白 内面：N4/灰	密	良好		3.2	(12)	外面：タタキのちミガキ 内面：工具によるナデ
29	SK1002 上層	壺	外面：10YR6/2灰黄褐 内面：2.5YR4/1灰黄	密(径～1mm程度の砂粒を含む)	良好		5.6	11.1	外面：ハケ、ナデ 内面：ハケ、ナデ
30	SK1002 上層	甕	外面：2.5Y6/1灰灰 内面：2.5Y6/2灰黄	密(径～2mm程度の砂粒を含む)	良好		3.6	(12.7)	外面：タタキ、ミガキか 内面：ナデ
31	SK1003	鉢	外面：10YR7/2にぶい橙 内面：10YR7/2にぶい橙	密(径～2mm程度の砂粒を含む)	良好	31		(6.3)	外面：ナデか 内面：ナデか
32	SK1003	壺	外面：10YR7/2にぶい橙 内面：N3/暗灰	密	良好		4.4	(21)	外面：ハケ、ミガキ、タタキ 内面：ハケ
33	排土	縄文土器 深鉢	外面：10YR5/2灰黄褐 内面：10YR5/2灰黄褐	やや粗い(径～4mmの砂粒・雲母多く含む)	良好	幅5.2		(4.8)	外面：縄文 内面：磨滅
34	SK1002 下層	棒状木製品				径(1.8)		残存長 (32.7)	



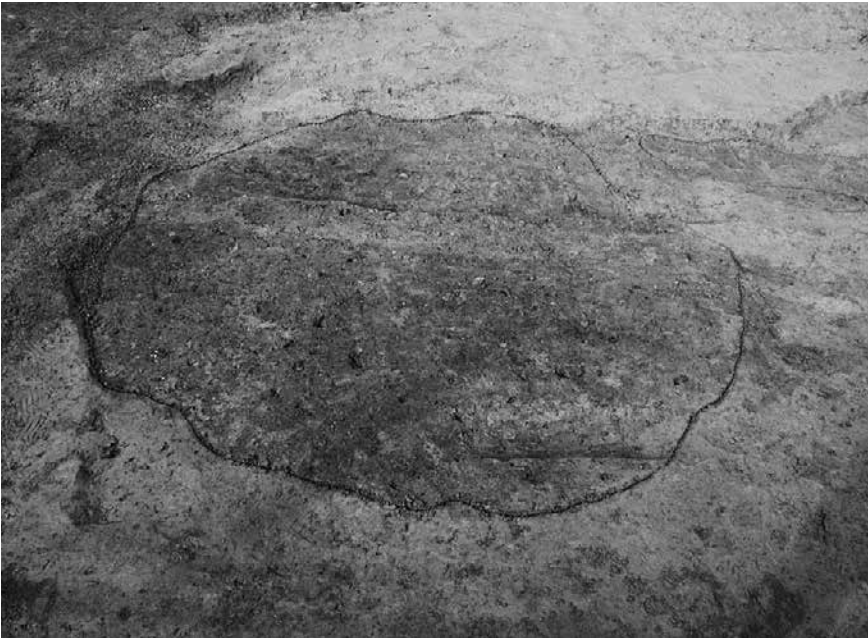
SK1001検出状況（南東より）



SK1001半裁断面（北東より）



SK1003半裁断面（北より）



SK1002検出状況（東より）



SK1002半裁断面（西より）



SK1002遺物出土状況（北西より）



SK1002遺物出土状況（南東より）



SK1002完掘状況（北東より）



調査区全景（北より）



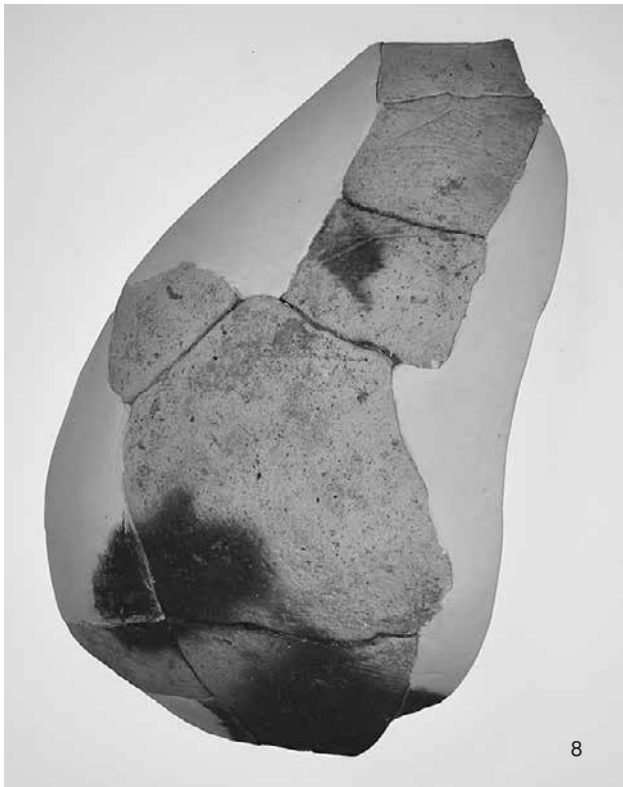
旧河道東壁断面（西より）

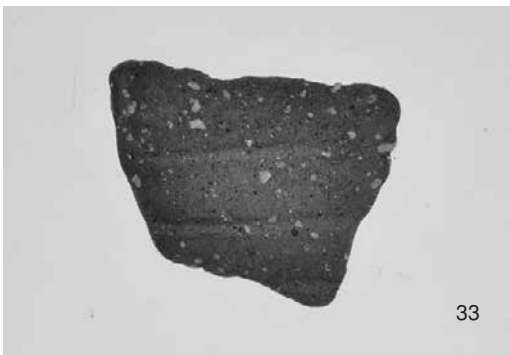
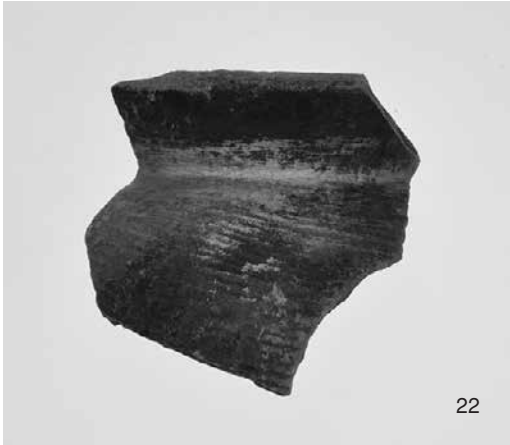


旧河道西壁断面（南東より）



旧河道（西より）

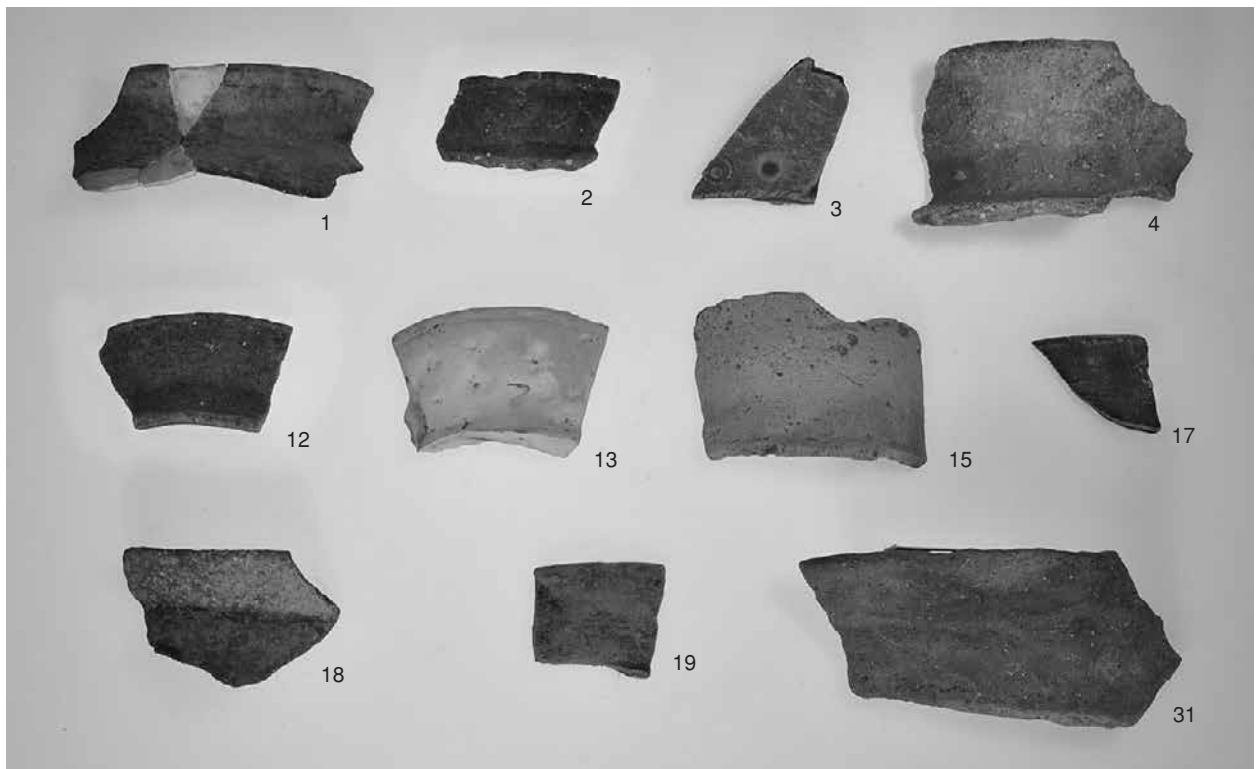




出土遺物②



出土遺物③



出土遺物④

報告書抄録

書名	桜井市平成22年度国庫補助による発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	桜井市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第37集
編著者名	丹羽恵二
編集機関	桜井市教育委員会 文化財課
所在地	〒633-0074 奈良県桜井市芝58-2 TEL0744-42-6005 FAX0744-42-1366
発行年月日	2012年3月30日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
纏向遺跡 第169次	桜井市 太田204-6	292061	11-D-487	34° 32' 47"	135° 50' 23"	20101124～ 20101209	58.6㎡	個人住宅建築に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な遺構	主な遺物	特記事項
纏向遺跡第169次	集落遺跡	土坑3基、旧河道	土師器、棒状木製品	

桜井市埋蔵文化財発掘調査報告書 第37集

桜井市

平成22年度国庫補助による
発掘調査報告書

発行 桜井市教育委員会
文化財課

〒633-0074 奈良県桜井市芝58-2番地

TEL 0744-42-6005

FAX 0744-42-1366

年月日 平成24年3月30日

印刷 株式会社明新社

〒630-8141 奈良市南京終町3-464